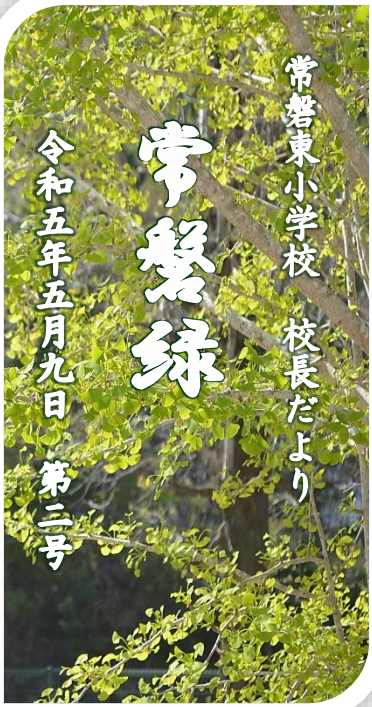

蒼天を皆上りゆけ鯉のぼり

授業参観日の代休明けの四月二十五日。藤の花咲く緑の道を抜けて学校前に来ると、思いがけず目に飛び込んできた鮮やかな青木川。赤、青、黒、橙、紫…錦のごとき鯉のぼりである。

大きな鯉は川の中腹に吊るされてなお、尾がせせらぎに届くほどある。小さい鯉は岸辺にと等間隔に結わえられ、ワイヤーは真っすぐ張られている。それが米山橋から鼎橋にわたり幾重にも。常磐中生になった本校卒業生も、何名かが設置に携わったと聞く。

その数日後の深夜は雷雨となった。翌朝の鯉のぼりのいくつかはワイヤーに絡まり、いくつかは川辺や草むらに落ちていた。引けば破れるのではないかと思うほど重い。降り続く雨を言い訳にそのままにしていると、夕方、「こどもの家」に児童を送った教師が、川に沈みそうな鯉のぼりを見つけて運び出していた。

そして、迎えた翌朝。雲一つない青空の下、鯉のぼりは全て並んで泳いでいた。聞けば、朝六時頃から川に入り、ワイヤーを緩めて結び直してくださった方が幾人もいたとか。その後は長い竹竿で、絡んだ鯉のぼりをいろいろな人が直している。

青木川の鯉のぼりは、微風でもよく泳ぐ。皆、頭を天に向けて青空を目指している。もともと鯉のぼりは、黄河の竜門と呼ばれる滝を登り切った鯉が龍に変身するという中国の故事にちなんみ、子供の成長と立身出世を願ってできた風習である。鯉のぼりは向かい風の中を泳ぐ。この姿は故事の滝を遡る鯉と重なる。しかし、青木川の鯉のぼりには、竜門に例えられるような狭い門は見受けられない。どの鯉も広い空を思い思いに目指しているようで、解放感に溢れている。

五月。連休が明けると運動会の練習が始まる。「めざすひがしっ子」の「Ⓛ心身を鍛え、たくましく健康な子」に一歩近づく季節の到来だ。鍛錬に忍耐が重なるかつての練習風景とは異なり、現在は安全に留意しつつ、自分のもてる力を出し切る指導が主流となる。それでも日ごと強くなる日差しの中、全校で、学年で、統制を取って動く練習は、子供にとっては試練となろう。学年によって、個人によって、負荷は異なってよい。自分で目標をもち、やってみよう、成し遂げようとする気持ちをまずは育みたい。その基盤があってこそ、たくましい心身が備わると考える。

逆境でも頑張り抜ける強い人に育ってほしい。失敗したりくじけたりすることもあるだろう。だが、そんな時にタイミングよく手を差し伸べてくれる人が周りにいることが、ひがしっ子の強みである。